

原爆文学研究会報

第四八号

原爆文学研究会 二〇一五年一月

被爆七〇年後に被爆者の体験記を書き残すということ 今夏、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では『被爆体験記集Ⅰ しまつてはいけない記憶』を発行しました。被爆七〇周年を機に、祈念館職員が被爆者の方々に被爆体験を聞き取り、原稿に書き起こした「執筆補助事業」による約一〇〇編の体験記のうち、五〇編を本にしたものです。A5判で五五七ページの本となりました。

執筆補助事業は平成一八年から続けられており、職員が二人一組で被爆者の方に聞き取りを進め、全員が一年に一編は代理執筆することになっています。皆、書くことのプロではないので、どのような問いを投げかけ組み立てればよいかについては、質問項目がある程度決められています。

(1)証言者ご自身について——被爆時の住所や家族構成、それぞれの方のお名前(表に出したくないとの希望の場合はアルファベット等に置き換え)、それぞれの所属(会社や軍属、学校等)。(2)被爆前の生活状況——比較的苦労はなかったとおっしゃる方も八月六日当日は勤労奉仕に従事していたりと、戦時の生活が垣間見えます。(3)被爆時の状況——被爆場所とその時、何をされていたか。また、原爆が投下された瞬間の音、光、色、臭い、感触などを細かに聞きます。光がどの方角に見えたか、といったことも詳しく聞き取ります。その後、どの方角に逃げたか、救助を受けた場所、家族の捜索、広島市内の被爆の現状……この部分が最も長く濃い内容になることが多いです。そして、私どもの執筆する被爆体験記のひとつの特徴として。(4)被爆後の生活状況にも多く文章を取ります。生活のご苦労や被爆の後障害についてお聞きすると、やはり病気に苦しんだ人が多いことに改めて直面します。今は、多くの方々が、お子さん、お孫さん、曾孫さんに恵まれ、平穏な日々を過ごしていらつしやいますが、その地点から振り

返るとな一層、被爆とその傷痕の尋常ならざることを思います。

原爆文学研究会の会員の方々から見るとマニュアル化された質問項目に疑義があるかもしれません(批判も是非いただきたいところです)。ただ、このように質問を明確にして、ひとつひとつのことを正確にしていくのには理由があります。この間に在籍して四年目となり、私なりにこの執筆補助事業をしていくなかで気づいたことです。まず、被爆体験記が、戦争や原爆投下といった人類の愚行への反省を促すことにあるのはもちろんです。未来の人のためにも同様です。同時に、例えば、高齢化で医療費負担の軽減や家族状況の変化により、今現在も、被爆者健康手帳を申請する人々がおり、被爆体験記に登場する人物として見つければ、申請の際の証人代わりとなります。このように、今も苦しんでいる人にも直接に役立つことがあります。

さらには、これまで黙って語らなかつた人々の証言から、戦時下・被爆時の知られていなかった状況も明らかになることがあります。私自身が経験したなかでは、『広島原爆戦災誌』の中で、ある国民学校の学徒動員先としては書かれていなかった軍需工場に駆り出され、高射機関銃の弾を荒削りしていたという当時の少年の話。己妻にあつた広島陸軍被服支廠で軍靴を作っていたという女性の話。己妻に被服支廠があつたとは初めて聞いたことでした。おそらく、このような埋もれた歴史はまだ多くあり、証言を元に事実として残していくことも私たちの大きな務めであると思っています。

今年も執筆補助事業の聞き取りの真つ最中です。特に、被爆七〇周年で、被爆者の方々の「今、語っておかねば」という並々ならぬ気迫すら感じています。被爆体験を伝え、残すこと、それを正確に行っていくことのために、その一助となればと思っています。(岡本芳枝)

第四八回 原爆文学研究会報告

二〇一五年八月一日(土)、二日(日)に、サテライトキャンパスひろしまで、第四八回研究会を開催しました。初日は二つの研究発表がありました。二日目は、午前中に「戦後70年」連続ワークショップⅦ「原爆文学」古典「再読3—大田洋子『屍の街』」を行い、午後から連続ワークショップⅧ「広島から問う、「原爆文学」と「戦後70年」」を行いました。

初日の宇野田尚哉氏の研究発表に対しては、「具体的な局面において御庄は詩人と医師の立場をどうとらえていたか」、「晩年の詩をどう評価するのか」、「丸屋博と御庄博実の二つがどのような緊張関係にあったのか」といった質疑のほか、実際に御庄氏と交流のあった方々から、人柄や医師としての活動についての発言がありました。

川口隆行氏の研究発表に対しては、「同時代の山代作品と比較することでとらえ方が変わるのではないか」、「作品に描かれる当事者性は同時代の「原爆の子」などに共通するのではないか」、「この物語における被爆者の存在感の少なさとそれに対する向き合い方に原爆文学的な問題が表れているのではないか」等の質疑がありました。

二日目のワークショップⅦの発表に対しては、作品が読まれなくなったことと政治や性の描写の関係について、佐伯洋子に関するメタファーや少女小説的描写について、出版社と作品受容の関係について、大田洋子の広島での受け入れられ方について、全く別作品の「ベスト」と接続される評価の語りについて等の質疑がありました。

ワークショップⅧの発表に対しては、コミュニケーションごとの証言の差異について、悩める男たちに対する女性の証言の語りについて、風景として描かれる朝鮮人被爆者の行方について、福田須磨子と石田忠の関係のとらえ方について、証言の生成に働く力学について等の質疑があり、二日間にわたって活発な議論が行われました。

◇ 研究発表 1

詩人御庄博実と50年代詩運動

宇野田 尚哉

本発表では、今年一月一八日に死去した詩人御庄博実(一九二五—二〇一五、医師丸屋博の筆名)の詩業に、一九五〇年代の詩運動との連関から検討を加えた。

御庄は、岩国で生まれ育ち、広島で旧制高校に通い、一九四五年四月に岡山医大に入学、同年八月八日には帰郷中の岩国から師友知己の安否を尋ねて広島に入り、入市被爆した。その後結核を患って一九四八年末からは国立岩国病院に入院し、そこで詩と出会うことになる。本発表では、発表者がかつて御庄氏宅で撮影をお許しいただいた当時の資料の写真を紹介しつつ、御庄と五〇年代の詩運動との関係の多元性を指摘した。御庄が岩国病院内の患者自治会・詩人クラブや広島へのわかれらの詩の会に加わっていたことはすでに知られているが、御庄は、そのほかにも、(1)左翼文化運動系全国誌とその系列の地方支部機関誌(造形文学会機関誌『造形文学』とその山口支部機関誌『過渡期』、新日本文学会機関誌『新日本文学』とその山口支部機関誌『新山口文学』、『新日本詩人』、『詩と詩人』、退院後は人民文学岡山友の会『岡山文学』など)、(2)アヴァンギャルド系全国誌(『芸術前衛』、『レアリテ』、『列島』、『山河』、『浪漫群盗』など)、(3)地域同人誌(広島『地核』、岩国『岩国文芸』、岡山『火片』など)と、多元的な関わりを持つていたのである。総じて言えば、詩人御庄博実は、政治的前衛と芸術的前衛の総合(＝社会主義リアリズムとアヴァンギャルドの総合)を目指した一九五〇年代の左派の詩運動を同時代的に生きるとともに、その後も詩作を続けた、最も有力な詩人の一人であったと言える。

また、初期の代表作「岩国組曲」(一九五二年)成立の背景には故郷岩

国が米軍基地に蹂躪されるという経験があったことを指摘し、御庄が左派の詩人として自立するうえで朝鮮戦争下での反戦運動の経験が決定的に重要であったことを明らかにするとともに、後期の代表作「組詩」『ヒロシマ』の、第二の故郷ともいべき地への追憶に立つ独特の作品世界について論じた。

本発表で紹介したものを含む御庄氏の旧蔵資料は、安田女子大学に寄贈され、現在整理中であるという。この貴重な資料群が一刻も早く公開され、広く閲覧に供されることを期待したい。

◇ 研究発表2

山代巴「或るとむらい」論

川口隆行

大江健三郎選・日本ペンクラブ編『何とも知れない未来に』（集英社文庫、一九八三・七）には、大江と長岡弘芳の対談が附されている。山代巴「或るとむらい」（一九五一・一二）について、長岡は、「原爆小説といった場合、ちよとずれるという感じを持たれるかと思うのですが、ぼくはとつても執着してまず」と述べる。やはり長岡が尽力した『日本の原爆文学』全15巻（ほるぷ出版、一九八三・八）の第一次構想段階では短編集（11、12巻）に含める計画であったことが判明している（近藤ベネデイクト「元編集者が残す『日本の原爆文学』全一五巻の記録」『原爆文学研究』11、二〇一二・一二）。

長岡と大江はこの小説について、「時代の制約を超え」た「普遍性」、「農村における庶民に対」する「あつたかい目」を指摘するが、「庶民」の描き方にせよ小説表現が生れる時代の文脈に即して具体的に検討する必要がある。『何とも知れない未来に』には、井伏鱒二「かきつばた」（一九五一・六）、大田洋子「ぼたる」（一九五三・六）も収められており、

山代と井伏は「非被爆者」、大田は「被爆者」であるが、朝鮮戦争という文脈を共有しつつそれぞれの方法と姿勢で原爆を描こうとしたと考えられる。

「或るとむらい」の場合、よそ者の被爆者に村の墓地を貸すことを拒むエピソードが語られる。そもそも村で一番の繁栄を誇るのは、流れ者が葬られていた場所を潰して建設した工場である。戦後の民主化政策の一環である農地改革によって農民の豊かさへの夢が物質化、それに拍車をかけたのが「朝鮮特需」とされる。だが夢の実現から取りこぼされた、祀られない死者は「崇り神」になるだろう。予備隊に入隊した息子をもつアサ代の姿を通して、夢が悪夢へと転化する恐れが示唆される。「民衆」の自画像を描く困難、宙吊りに読者を「つりこ」み、朝鮮戦争下という時代の中で「不幸者の魂」「靈魂」と出会わせようと試みたのが「或るとむらい」という小説なのだ。

◇ 「戦後70年」連続ワークショップⅧ

原爆文学「古典」再読3——大田洋子『屍の街』 『屍の街』はどのように読まれてきたか？

中野 和典

発題と全体討論に先立って、大田洋子『屍の街』の受容史を整理した。まず、図書情報について、『屍の街』は一九四八年一月に中央公論社から刊行されて以来、抄録や英訳版や電子テキスト版も合わせて一七種類形で出版されていることを確認した。初版で削除されていた部分を補った「完全版」は一九五〇年五月に冬芽書房から刊行されている。

『屍の街』研究文献の総数は、今回確認できたものだけでも約一六〇本に上った。その中から重要と思われるものについて要点を整理しながら紹介した。具体的には、『屍の街』にも実名で登場する佐伯綾子の最

早期の評、「完全版」に掲載された大田洋子による自作解説、最も優れた記録文学として評価した佐々木基一論、古い方法によりかかっていると批判した花田清輝論、被爆という出来事の特異性を強調した中島健蔵論、記録性をそのまま肯定した栗原貞子論、記録性ではなく証言性を重視したトリート論、作品ではなく解釈の創造性を問うた村上陽子論、ほぼ絶版の状況にあることを報じた「中国新聞」の記事、大田洋子の戦争協力を問題化した江刺昭子論、トラウマ記憶から物語記憶へという大きな文脈の中に位置づけた川口隆行論、アメリカ不在のまま原爆を物語化することの倒錯を指摘した花田俊典論等を紹介した。

最後に研究文献を整理して見えてきた課題を挙げた。『屍の街』の「後日談→原爆投下の前後→後日談」という時間構成を、ありきたりと評した黒古一夫論と原爆被害が被爆時に限ったことではないことを示すものとして評した「中国新聞」の記事を比べ、後者の方により説得力があることを述べた。『屍の街』の時間構成については、もつと緻密な分析があつてよいと考える。また、本文における方言やイニシャルの用い方についても、そこにどのような力学が働いているのか、他作品などとも関連づけながら論じる必要があることを指摘した。そして一九九〇年にアメリカで出版された『屍の街』英訳版が果たしてどれほど読まれているのか、という問いを提示して報告を終えた。

◇「戦後70年」連続ワークショップⅦ

原爆文学「古典」再読3——大田洋子『屍の街』

古典再読Ⅲ 大田洋子「屍の街」

長野 秀樹

原爆文学の「古典」として「屍の街」を読み返してみると、まず、原爆文学の先駆作品として、その後の原爆文学に共通する要素が、きちん

と含まれていることが確認される。それは、直接的に主人公が体験した被爆直後の被爆地の実状が描かれることはもちろんだが、それ以外に、新聞記事を使った情報の重層化や、噂という形で取り入れられる被爆地の不安の形象化、あるいは病院という、情報の集積地が描き出されるということでもある。

また、被爆直後から一定の時間が経過し、人々の不安が放射線の影響へと移っていく様子も「屍の街」にも描き出され、これもまた、原爆文学作品に共通する要素である。

一方、語り手に注目してみると、作品の中には「語りの現在」を指し示す語句が散見される。第1章に「9月も終わろうとする今」「その日から一カ月経った九月六日は」などの表現があり、これらは「物語の現在」を指し示すと同時に、「語りの現在」もまた、指し示していると考えられる。また、24章には「初めの方に書いたように」、26章には「はじめの章に書いたような」などの表現が見られる。こうした表現をそのまま信じるならば、ここには執筆順を推測する手掛かりがあるはずである。この他にも30章「九月末まで生きるかどうかと云っていたのに、いまも生きている」などという表現も、「語りの現在」や執筆時を推測させてくれるであろう。

また、第3章にみられる「琴歌」という表現は、30章に再び「今年の田園の鬼哭啾々とした琴歌のようにきこえる」として登場し、登場人物としても二つの章には「銀ちゃん」が登場するなど、明らかな呼応関係が見られる。これらの点は、作者の意識の中に執筆時に「記録」を超えた「作品」としての意識があったことを意味しているとも解せよう。あわせて例外的に固有名詞が与えられている「佐伯綾子」(モデルが実在する)に関わる問題なども、発題者として論点を提供したい。

◇ 「戦後70年」連続ワークショップⅦ

原爆文学「古典」再読3——大田洋子『屍の街』

「物語」を「空隙」で語るといふこと

——大田洋子の「しびれ」と「さまよい」について

柳瀬 善治

本発表では、昨年発表した拙稿「三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論的覚書その3——現代小説を題材に「核」と「内戦」について考える——」（『原爆文学研究』13、二〇一五・一二）での論点を基にして、大田洋子の『屍の街』をはじめとするいくつかの作品について再検討し、再評価を行った。

①まず、先行論が指摘する大田洋子の作品のある種の「語り難さ」は、決して作品の閉鎖性や完成度の低さに起因するものではなく、原爆体験がもたらした表象の失調状態に真摯に対応しようとしたことに起因するものであり、それは三島由紀夫や中上健次が直面した小説の不可能性の問題と同質のものであるという理論的前提を立てた。

②そして、大田が『屍の街』で、原爆体験を「物語を持たない空間」（G・ドウルズ）、つまりいかなる因果性や物語にも回収されない表象不可能な空間での出来事としてとらえ、それを「静寂」とその空間に響くかすかな「声」として表象していること、そこにはまた話者の「さまよい」「しびれ」と呼ばれる物語化への違和が同時に記載されているのだとした。

③さらに、こうした姿勢は、いとうせいこう『想像ラジオ』に対するいくつかの批評で提起された「死者の声を沈黙によって表象する」という小説技法の可能性も同時に示しており、大田の『ほたる』でも「死者の声を安易に表象しない姿勢」は、「ほたる」と「なめくじ」に死者の声を見出し、かつそれを疑う話者の姿勢に伺えるとした。

④最後に、大田の『夕風の街と人』における叙法は、複数の物語が

それぞれ不協和と脱臼を起こし、決して焦点を結ばないまま描き続けることで、「物語を持たない空間」の「空隙」を埋めることなく残し続けるものであり、また、『夕風の街と人』の、人々の「声」の崇高と滑稽を同時に表象する叙法は、現代の原爆文学のもう一つの課題、「原爆をユーモラスに語る事が可能か」という問いにも、大きなヒントを与えるものであると結論付けた。

WSⅦの様子



WSⅧの様子



◇ 「戦後70年」連続ワークショップⅧ

広島から問う、「原爆文学」と「戦後70年」

被爆体験記における朝鮮人被爆者の表象

——1970年代まで

黒川 伊織

石牟礼道子「菊とナガサキ―被爆朝鮮人の遺骨は黙したまま」（『朝日ジャーナル』一九六八年八月二日号）は、「一番最後まで残った朝鮮人たちの死骸のあたまの目ん玉ばカラスがきて食うとよ」と、朝鮮人被爆者に対する日本人の根深い差別意識を告発した。これ以降、丸木位里・丸木俊「からす」（『原爆の図』第四部、一九七四年）に象徴されるように朝鮮人被爆者への差別は自明のこととして語られるようになった。

本報告では、一九七〇年代までに発行された被爆体験記のなかで、日本人被爆者がどのように朝鮮人被爆者の存在に言及しているのかを確認する作業を通じて、朝鮮人被爆者に対する差別という言説が生まれ、ひろく流布する過程を明らかにした。

占領下で発行された被爆体験記では、朝鮮人被爆者と助け合った体験が多く記される（石田雅子『雅子艶れず』一九四七年、橋本くに恵「忘れ得ぬ親切」（『原爆体験記』一九五〇年）、町田多美子「記念の腕時計」（『白夾竹桃の下』一九五一年）など）。一方で、救援に入った朝鮮人の行動を暗に非難する言説も見られる（『長崎精機原子爆弾記』一九四九年）。注目すべきは、「アイゴー」という慟哭の声と、チマ・チヨゴリを着用した女性の姿が、日本人と朝鮮人を区別する徴とされている点である（福田須磨子『生きる』一九六五年など）。

ところで、石牟礼が書いた事実を彼女に伝えたのは、一九六八年当時長崎で『原点』というミニコミを発行していた西村豊行であり、西村と朝鮮人被爆者の遺骨を収集していた朝鮮総連の活動家の間にはつながり

があった。西村は『ナガサキの被爆者』（一九七〇年）により、被爆地長崎における朝鮮人・部落民・キリシタン差別を告発して衝撃を与える。

石牟礼や西村による告発は、ベトナム反戦運動を画期として自覚された日本の（加害性）を象徴するものとして、同時代に重要な意義を持ったのであるが、朝鮮人被爆者に対する差別の実態については、朝鮮人被爆者の属性（被爆地・職業・年齢・性別など）に即した綿密な調査が必要となるだろう。今後の課題としたい。

◇ 「戦後70年」連続ワークショップⅧ

広島から問う、「原爆文学」と「戦後70年」

「原爆」をめぐる想像力の枠組み

——朝鮮戦争とベトナム戦争を手がかりに

高 榮 蘭

一九六〇年代は、①堀田善衛の「審判」（一九六〇）、②井上光晴「地の群れ」（一九六三）、③いいた・もも『アメリカの英雄』（一九六四）、④井伏鱒二『黒い雨』（一九六五）など、直接被爆を経験していない書き手たちによる、それまでにはない新たな文学的実践が話題になった。具体的に説明すると、日本に原爆を落としたアメリカのパイロットの視点から描いた①③、被差別部落民、被爆者の対立構図を描いた②、教科書に掲載され、原爆文学を国民文学へと導いたと言われる④などである。

そのなかでも、本発表では、一九四五年八月六日、エノラ・ゲイの搭乗員であったポール・リポートを視点人物として加えた、堀田善衛の『審判』に注目した。ここでは広島上空に原爆を落とす側にあったアメリカ人のパイロットと、中国戦線で敗戦を経験した旧日本兵を対置させている。ポール・リポートは原爆投下の結果に、一方、旧日本兵であった恭介は、上官によってレイプされた中国人女性を殺害した記憶にとらわれている。しかし、旧米兵ポール・リポートは自殺に追い込まれていくの

に対し、恭介は姪唐見子との近親相姦（唐見子―日本人女性の身体）を媒介にレイプと殺害の記憶から救われていく。ここから浮き彫りになる民族とジェンダー構図について注意を払いながら、一九六〇年代において日本が東アジアとの国交正常化を進めていく時、対米・対中国との戦争の記憶がどのような形に召喚されてくるのかについて注目した。まさにこの時期「原爆」文学の枠組みが編成されたと言われているのだが、「国民文学」として「原爆文学」が立ち上がる際、アメリカ・中国との戦争の記憶、韓国・台湾に対する植民地支配の記憶は如何に位置づけられたのかに関する分析を行った。

◇ 「戦後70年」連続ワークショップⅧ

広島から問う、「原爆文学」と「戦後70年」

「証言」の力学——「原爆文学」の1970年代

成田 龍一

「原爆文学」の一九七〇年代は、「調査と証言の時代」の時代にあたり、証言のもつ力への確認がなされ、証言の領域が確立する時期である。そのことを背景に、「証言」にかかわる論点を考察した。

まずは、福田須磨子『われなお生きてあり』（筑摩書房、一九六八年）に着目し、福田が原爆投下の瞬間とその後、さらにその後（生活史）を綴り、【第一部】では、一九四五年八月九日を軸とする日録を記し、【第二部】では一九四六年二月―五年一〇月までの「漂流」の時期を扱い、【第三部】では一九五三年四月以降の「抵抗」への飛躍、被爆者としての「自覚」、政治への関心と関与を論じていることを紹介した。

福田の特筆すべきこととして、調査史（『生活史グループ』）と接点を有することがある。その中心の石田忠（二橋大学）は「面接調査」により、被爆者の証言を練り上げ、「生活史」を叙述し、意味付けと文脈づ

けをおこなう（『反原爆』正統、未来社、一九七三、七四年、など）。石田は、福田の「定式化」を探るのだが、福田には、書かれたものがすでにある。福田にとっては、石田との接触は、生活史をめぐる自身の解釈との相克となる。

石田が提供する「生活史」Ⅱ「証言」は、こうした非対称性が組み込まれたうえで、福田は「被爆者」という存在規定のもとに括りあげられる。七〇年代に「証言」を生成する力学がうかがわれる。

このとき、二重の相克を石田は意識している——「私の描くことのできる福田さんの戦後史は、もとより彼女自身によるそれとはちがったものになるかも知れない。しかしそれだけに、そのことによって私は福田さんとの間に本当の意味での（対話）をもつことができるであろうと考えている」。

だが、石田の自覚とは別に、福田の「生活史」は、あらたに固定化され、ここからの意味づけが開始される。福田の有した複数のアイデンティティが、「被爆者」に集約されることであり、そのことによって、当事者のもつ「絶対性」、証言の「真実性」が、専門家の手でオーソライズされる…。

一九七〇年代の「証言」をめぐる光景を、ここに垣間見ることができる。

ワークショップⅦ印象記

寺沢 京子

ワークショップⅦは、「原爆文学」「古典」再読3―大田洋子の『屍の街』である。中野和典氏、長野秀樹氏、柳瀬善治氏からそれぞれ発表があり、その後、全体討論に入った。

まず中野氏が書誌、研究文献や『屍の街』に対する様々な評価について話された。評価には賛否両論あって興味深かった。記録の域を出ず小説としては評価できない、いや優れた記録文学である、作者の戦争協力を不問にしたままでは不信を招く、いや他の文壇人にも前歴はある、などである。

長野氏は「表現技法の骨格」、「物語と語りの現在」などの視点から発表された。『屍の街』に何度も出てくる「佐伯綾子」についても話され

た。中野氏も言及されていたし、全体討論でも挙がった名である。私も『屍の街』を読み、佐伯綾子とは誰だろう、と気になっていたのだが……。全体討論ではメタファーではないか、小説家・大田洋子を認めていた存在だろう、などの意見が出た。

柳瀬氏は「物語」を「空隙」で語るということ―大田洋子の「しびれ」と「さまよい」について―を話された。「描写された風景は因果性の中に回収できない」、「空隙に死者の声をいかに聴きとるか」など哲学的な考察だった。『原爆文学研究』13に書かれた内容と絡ませて語られたので、私は神戸に戻ってあらためて読ませていただいた。

作品の評価などの話を伺いながら、私は二〇年前の阪神・淡路大震災後の議論を思い出していた。小説のことではないが、震災後すぐに出された「機会詩」に対して否定的な意見が多かったのだ。これらは単なる記録に過ぎず、時を経てじっくり掘り下げて書くべきだというのである。

当時、被災地の詩人たちによって震災三か月後、一年後、二年後に『詩集・阪神淡路大震災』という三冊の本が出された。

読み比べてみると、確かに三か月後に出された詩集には特に記録的な作品が多い。しかし生死に関わる切実な内容で、マスコミにもよく取り上げられていたのだ。たとえば「燃えさかる長田の体育館から／三体の遺体と共積みされて／ひとりで我が家にやってきた姪……」などである。ただ、一年以上経った頃から、仮設住宅での「孤独死」などの社会問題が顕在化してきた。仮設住宅が元の住居から離れた人口島などに建てられたため、被災者が孤独に陥ったのだ。

直後の悲惨な光景を決して忘れないこと、次々と生まれる問題点を掘り下げて考えること、さらにそれらを作品化する力が必要なのだ。『屍の街』にある「人間の眼と作家の眼」が求められるのだろう。

ところで、今回の原爆文学研究会は〈サテライトキャンペーンパスひろしま〉で行なわれたが、ちょうど地下展示場で「原爆と戦争展」があり、少し見ることができた。被爆七〇周年記念の迫真の展示だった。「8・6ヒ

ロシマ大行動」などのチラシも手渡され、広島の反戦・反核への強い思いが伝わってきた。

ワークシヨップⅧ印象記―久しぶりの原爆文学研究会

玄 善允

会員でもなければ常連の参加者でもない僕が、今回わざわざ広島まで駆けつけたのは、殆ど瓢箪から駒のように科研に採択されて、あわてふためくことになってしまった「済州4・3文学研究」に関するヒントを求めてのことだった。済州4・3文学はある大事件（大量殺戮）に関する表象という意味で、原爆文学と一定の同質性があるに違いない。そこで、日本ではほとんど先行研究がない4・3文学とは対照的に、既に膨大な研究の蓄積がある原爆文学研究のおこぼれを拾い集めて、まさに暗中模索状態にある私の4・3文学研究への弾みをつけようというわけだった。

そして、その目的は予想以上に達成された。例えば、会場で『出来事の残響』（村上陽子さん著）に遭遇して、「4・3事件の残響を探し出し、それに耳を澄ますことが僕の仕事なのだ」と思い当たった。歳を重ねるにつれて、社会の情報に距離感が募り、あげくはすっかり世情に疎くなってしまっている僕には、「残響」という語句がもたらす「ある感じ」だけでも既に大きな成果だった。

それにまた僕にとつて楽しい時間だったのは、やはり文学作品の読みの多様性、そしてだからこそその喜びを再確認できたからである。僕が印象記を書くように求められたワークシヨップⅧに関して言えば、高栄蘭さんの「悩む男たち」という表現が実に印象的だった。

高さんが女性たちの声を封殺・篡奪しながら「悩める男たち」の語りとして厳しく批判なさった「黒い雨」、「地の群れ」、「審判」などは、僕が若かりし頃に愛読した作品ということもあって、自分の不明を何十年も後になって気付かせていただいた。このようにして更新される解釈、

それは読者の自由と責任の担保となるわけで、残された寿命がしだいに短くなっている僕などには、自分の人生の解釈の更新の可能性も垣間見させてくれるような気持ちになって、刺激的だったし、楽しくないわけがない。それにまた高さんの議論は明らかに先に触れた村上さんの議論とも通底するもので、まさに現在の批評の地平を構成しているように思えたことも、何故かしら楽しい刺激だった。

以前にも、在日朝鮮人のサークル誌「ヂンダレ」の共同研究の延長で、それを対象化するために「われらの詩」研究会に、さらにはその延長で原爆文学研究会に顔を出したことがあったのだが、その時と同じように、社会、歴史、そしてテクストを重層的に絡めてものを考える悦びを体感できる時間だった。感謝、感謝である。

彙報

第四八回 原爆文学研究会

○日時 二〇一五年八月一日(土)、八月二日(日)

○会場 サテライトキャンパスひろしま

○研究発表(一日目)

発表1 詩人御庄博実と50年代詩運動

発表2 山代巴「或るとむらい」論

○「戦後70年」連続ワークショップVII(二日目)

原爆文学「古典」再読3——大田洋子『屍の街』

司会者から——『屍の街』はどのように読まれてきたか?

発題1 古典再読Ⅲ 大田洋子「屍の街」

発題2 「物語」を「空隙」で語るということ——大田洋子

子の「しびれ」と「さまよい」について

○「戦後70年」連続ワークショップVIII(二日目)

広島から問う、「原爆文学」と「戦後70年」

司会・コメント 山本 昭宏

報告1 被爆体験記における朝鮮人被爆者の表象

——1970年代まで

黒川 伊織

報告2 「原爆」をめぐる想像力の枠組み

——朝鮮戦争とベトナム戦争を手がかりに

高 榮蘭

報告3 「証言」の力学

——「原爆文学」の1970年代

成田 龍一

編集後記

昨年八月から始まった連続ワークショップも今回で一区切りをつけました。会員外からご寄稿いただいた成田龍一氏、玄善允氏にお礼申し上げます。会が行われた八月の広島市では、広島県立美術館で「広島・長崎被爆70周年 戦争と平和展」が開催されていたのですが私は時間の都合で見ることが叶わず、一〇月に入ってから長崎展に行ってきました。

ナポレオン戦争から原爆まで幅広い展示の中で、個人的に時間をかけて見たのは「原爆の図 第三部〈水〉」でした。実物では図録や写真だと読み取りづらい微細な表現を近づいて見ることができのですが、何より〈体で視る〉という体験をさせてくれます。また、東松照明の写真「熱線と火災で溶解変形した瓶」は以前にも観たはずなのですが、人体の「溶解変形」を思わせ、やはりしばらく立ち止まってしまいました。こうした視覚表現に関しても、一二月に福岡市で開催する国際会議「核・原爆の表象／文学」では議論されます。皆様の参加をお待ちしております。

(楠田剛士)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四—〇一八〇 福岡市城南区七隈八一—一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) / e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>